

被災地の観光化と日常生活をめぐって

浜元 聡子

2006年5月に発生したジャワ島中部地震に関わるようになって以来、インドネシア各地で発生した主要な自然災害などについて調べ、被災地を実際に訪れ、被災者からの聞き取りなどをおこなってきた。その過程で、ふたつのことについて考えるようになった。ひとつは、「スマトラ以降・スマトラ以前」とでもいうような、被災地とその外部支援者との関係があるのではないかということである。ふたつには、被災の当事者・社会による水際立った組織力や外部社会との交渉や協力関係が発揮される背景にはなにがあるのかということである。それを考えるひとつの切り口が〈被災地の観光化〉をめぐるさまざまな出来事ではないかと考えるようになった。

このようなことを考える一方で、〈本家〉のアチエを訪れる機会はなかなかなかった。わたしの調査地は、スマトラ以降では、2006年5月のジャワ島中部地震の被災地と、2010年ムラピ山噴火の被災地である。比較のために、2006年5月に発生した東ジャワ・ラピンド・ブランタス社のガス井が原因とみられる泥火山の熱泥噴出とそれともなう広範囲に及ぶ地盤沈下の被災地も訪れている。スマトラ以前では、2004年3月の南スラウェシ州ゴワ県バワカラエン山山頂崩落による地滑りの被災地である。被災の規模も災害の性質もことごとく異なるため、単純な比較はできないが、〈観光〉の要素を含んだ外部者との関わりの有無が、復興過程の多様性と今日の特徴を表しているようにみえた。こういったことを考えていた時に、思いがけなく、アチエで開催される被災7周年記念ワークショップに参加できる機会を与えていただくこととなり、たいへんありがたく思った。

◆被災地観光のポジティブな可能性

ワークショップでのわたしの報告の骨子は、スマトラ沖の経験以降、さまざまな外部者がそれぞれに多

様な関わり方で、被災地の社会経済復興に関わるようになってきたこと、また被災社会自身も次々とやってくる外部者を利用して、観光復興とでもいうべき行動を起こしているのではないかということ、それがもっとも顕著に表れている様子は、インドネシアの四年制大学における必須学外社会奉仕活動(Kuliah Kerja Nyata; 以下、KKN)のプログラムに見ることができるのではないかというものであった。そして、災害復興における観光復興は、ポジティブに利用される意義があると結論づけた。



半球型の半永久型被災者住宅

被災地の観光化というと、個人的には多少の倫理的な抵抗のようなものを感じないわけにはいかないところがある。しかしインドネシアでの事例を多く踏まえてみると、被災地社会において、皆が前向きに明るく復興に取り組むことができるということを最重要視するとすれば、観光は打って付けの手段に思われてくる。たとえば、幼稚園や小学

校の遠足あるいは社会見学、PKK(婦人会)などの視察といった目的で週末には数珠つなぎに観光バスや自家用車が訪れることで有名な被災者シェルター村がジョグジャカルタにある(ドーム型避難シェルター)。

インドネシア人にとってのファストフードに相当する牛肉の団子汁(Bakso)を、今まで誰も試みることがなかったナマズの魚肉で作り、観光復興を目指そうというKKNプログラムも実施された。このプログラムは実際にはナマズ養殖がうまく行かず失敗したのだが、新聞やテレビニュースで報道されたため全国的な話題になったことと、明確に観光復興を念頭に主要テーマに据えたユニークなものであったため、学部横断的な教員の研究グループが結成され、調査研究に引き上げられて、複数年の予定で取り組まれることになった(ガジャマダ大学)。

みながみな、被災地のかわいそうな人を助けようという動機で被災地にやってくるわけではない。中には明らかに野次馬的関心や単純に被災地とはどのよう

なものであるかを見たいという気持ちにしたがってやって来る人もいる。だからこそ、そういう人々ターゲットとするさまざまな飲食屋台が被災地に現れるのであるし、被災を象徴するなんらかのアイコンがある場合には、それをモチーフとした土産物を生産する被災者も出てくる。このKKNのプログラムは、被災者もKKNの学生も、楽しく災害復興支援に関わってみたいという気持ちをストレートに表したものである。いろいろな人が長く被災地に関心をもってくれることもまた、なんらかの形で被災地支援につながるということなのかもしれない。

こういった傾向を、ポジティブに受け取り、かつ、なんらかの形で外部者が地域防災や日常生活における防災意識に関心を持つようになる相乗効果があるかもしれないと考えれば、(新しい考え方ではないかもしれないが)被災地支援に有効な関わり方のひとつとして、観光を位置づけることができるのではないか。いや、それを考える場合、アチェではどうだっただろうか。このことを、アチェで一番みたいと思っていた。またできるだけたくさんの人と、被災地の観光復興についての意見を交換してみたいとも思っていた。同時に、被災から7年が過ぎたアチェに暮らす人々の日常生活をぜひ見たいとも思っていた。

◆ほの見える援助をめぐる受け止め方の違い

ワークショップの発表は、どれも興味深いものであった。とくに深く感心したのは、参加者であるアチェの人々の災害研究に対する関心の高さであった。長時間にわたるワークショップにもかかわらず、途中退席する人もほとんどおらず、質問の内容もレベルが高く、わたしはひたすら感心するばかりであった。

その中で、個人的にもっとも興味深かったのは、いわゆるバンダアチェとその周辺地域とでは、災害復興をめぐる外部からの感心の向けられ方の多寡や、援助(物質的にも金銭的にも)の内容に対して微妙な受け止め方の違いがあることを示唆する質問がふたつばかりあったことである。

観光というフィルターをとおして〈被災地化〉していく被災地と、日常生活に追われながらいつのまにか〈被災地〉であったことを脱出していく被災地とが、ということなのだろうか。少なくとも、ジャワの被災地には当てはまる。しかしこれをひとつ〈観光〉ということだけで理解するのは困難でもあろう。また観光化することで、さらに一極集中的な関心の持たれ方の偏りが顕著になりもする。

ワークショップの場の外でことばを交わしたア

チェの人が忘れられない。「もしアチェに集まった義捐金がすべて正しく使われたのであれば、今頃、アチェ州はシンガポールみたいになって、インドネシアから独立していたはずだ」というものである。誇張もあるだろうし、認識の違いや理解の仕方の違いといったものもあるだろう。が、今、これだけ穏やかな生活を取り戻し、すっかりと再生したかのように見えるバンダアチェの街の中でも、さまざまな人々の意見が蠢いているのかもしれないことを思った。

◆被災前の日常はどの程度まで回復されたのか

津波博物館や街の中心部の有名なモスクの前庭に、休日の午後に集まり思い思いの場所で弁当を広げたり、写真を撮ったりしている家族連れや若い人々の集団をみた。ひじょうに平和な風景であったことが強く印象に残っている。被災以前からモスクの前庭が市民にとっての憩いの場であったのか、津波博物館に相当するような人々が集まる場所が別にあったかどうかを、誰かに尋ねる機会はなかった。しかし、少なくとも現在のバンダアチェに暮らす人々には、ごく日常的な平和な時間があることを確認したように思った。

また市内の各地に、働く母親のための長時間保育の乳幼児保育園があることにも強い感銘を受けた。わたしの子どもを一時預かりしてもらった保育園(PAUD: pendidikan anak usia dini)の施設は、近代的な清潔さと機能性を備える一方で、伝統的なゆりかごを多数配置するなど地域文化を取り入れたものであった。インドネシア各地でPAUDが開設されるようになっていくが、アチェの場合、働く女性が元々多かったのか、あるいは被災以降の社会変容となにかに関連があるのか。被災から7年を経たアチェの人々の日常生活を、ほんのわずかに垣間見ただけであるが、次から次へといるいろいろな関心が呼び起こされたように思った。

被災以前の日常がどの程度まで回復されたのか、あるいは外部からの影響を受けてどの程度まで変容したのかについて、わたしは具体的なことはまだほとんど知らない。そういった日常生活を送る人々にとって、被災経験の観光化はどのような意味を持つことになるのだろうか。実際に、アチェの外から、明確な観光の意識をもってインドネシア人がある程度規則的にやってくるようになっているのだろうか。また被災を経験した人たち自身が、津波博物館やモスクの前庭に集まり語り合うのはどんな話なのだろうか。アチェで改めて考えたこれらの疑問は、〈アチェ以降〉の被災地で答えを探してみたいと思っている。